

# 我家の農業後継者

市之瀬 長井正樹

我家の農業後継者、範規。  
 満六歳、幼稚園さくら組（年長組）である。本人はさくら組で考へていないであろうが、私は一方的に決めている。よ、こいつを農業者に育ててやる。そう私が決心したの、は、長男が三歳の時である。稲が乳熟の頃、女房と二人で生育調査をしている脇で稲穂をつかんで遊んでいた長男「お母さん、お米からお乳が出たよ」何の事はない、乳熟期の稲を指でつぶしたら汁が出て指が白くなったのを見て、お乳が出たと思つたらしい。女房は、「そうだよ。」

## 良質米多収種競作会 最優秀に高橋さん

今年も「良質米多収種競作会」が実施されましたが、このほどその結果がまとまりました。  
 最優秀賞には、一反当たり六百二十・八キロの収量を記録した高橋博さん（新潟）のコンヒカリが選ばれました。なお優良賞以上の人賞者は次の方たちです。  
 最優秀賞：高橋博（新潟）  
 優秀賞：高橋正吾（新潟）、近藤陽一（新潟）、笠井均（梅ノ木）  
 優良賞：近藤文則（新潟）、本望忠（大庭）、寺尾佐武郎（新潟）、諸橋秋栄（七日町）  
 高橋康樹（善道町二）

中にもちがいが無いが、一人の男が地域の為を命をかけたことが、これだけ永い年月が流れたにもかかわらず、忘れられることもなく、親から子へ、子から孫へと語り継がれている。父は私に、いかに太郎兵衛のやりとげた仕事を大きかったかを聞かせ、こうした先人の血と汗の歴史の上に現在の市之瀬の美田があることを伝えられたのであろう。

## 優秀賞

# 日本の食糧危機について思う

小合中学校三年 丸山朋美

餓死、飢饉、栄養失調、大戦に敗れた昭和二十年代の日本は、この言葉にあふれていた。歴史は語る。食糧がない、食べる物が無いのだ。人々は腹をすかせて次々と倒れていく。なんと恐ろしい事だ。空腹の辛さに泣きわめく子供達の声が聞こえそうだった。当時は、このように食糧の危機状態などと言つたらそれこそもう大変な値打ちだったのだろう。

ら多量の穀物を輸入しているからと言う理由と、我々が米を食べなくなったからである。アメリカから輸入する穀物の中で小麦がある。その粉から作るパンや、めん類を日本人は好んでよく食べる。そのため米が大量に余り、今は四八〇万も余っている。こんな米が余っているのなら、アメリカから穀物なんて輸入せず、日本国民にもっと米を食べようと思ふればよいではないか、と思う。だが、そうはいかないのがこの世の中と言つてころらしい。日本はアメリカに大量の自動車、その他電気製品を買つてもらつている。そのアメリカから何も日本は買わない、言う

任の先生と、どの高校を受験するかを進路相談から始まった。父、母は普通高校にと願っていたし、本人も漠然とサラリーマンを考えていたのが、その日には、農業高校へ行きたい、に変わった。理由が簡単である。中学の先輩が加茂農林へ行って、農林の良さを話してくれたから、農林でなければならぬ、何が何でも加茂農林である。子を見た父のあわてた様子は、いまでも忘れられない。本当に今考えると、私にとって一生の職を決めることなんて、たわいのないことだ。そして、次は、と考えると同時に自分の回りを見れば、あまりにも父が老いていた。これは私が力をかかさなければ気が済まない。そのままたちの間に、間作業手順を学び、二年目には作付計画、施肥、防除とすっかりまかせられ、本場の百姓がここから始まる。

なれば、と反省すること。またたび。こんな私が農業を続けてこれたのは、新津の中に農業を学ぶ本場が多くあったこと、多くの友に恵まれたこと、いつも結論はそこに行きつく。

農林に生まれ、育つた私。そして農業に職を求め、農業の中に自分を見い出そうとしていた私に、何の抵抗もなく湯田太郎兵衛を尊敬する気持ちが生まれたのも、ごく自然な物ゆきである。「尊敬する人物は？」との問いに、ちゅうりよすることなく「湯田太郎兵衛」と口をついて出た。また、ごく当然の答であった。

そんな父が百姓の心を語る時、すなわち父の眼が輝き、身をのりだす時、一番長く登場する人物は、湯田太郎兵衛であった。私がある面接試験を受けた時のことである。問（あなたの尊敬する人物は？）  
 答（湯田太郎兵衛です。）  
 問（その人物はどんな人ですか。）  
 答（江戸時代、市之瀬の親様をしていた治水の神様。百姓の指導者です。現在その徳を称えたい碑が残され、太郎兵衛親様を地蔵として祀り、部落民の信仰を集めています。）

私の尊敬する湯田太郎兵衛とは、農村市之瀬と切り離して考えるののできない人である。洪水・湛水の常襲地帯であった市之瀬を水から守ろうと立ちあがり、村民の心を動かし、みずから先頭に立ち、女寮は作業、男寮は鎌・竹槍をかまへ、隣接部落と流血をみながら、市之瀬郡地に水が流れ込まないように延々と続く土塁（後に親様圃と呼ばれる）を築きあげた人である。

当時の村のあらさ、娘を売らなければならぬ程の村人の暮らしぶりの貧困、洪水の悲惨さ、そして太郎兵衛親様の気持……こうしたことが、後に土地は農民に、という小中にも望みながら、わいせつをたてるかたわらの伴に眼をやさて忙しくなる。それまでも、親の私がやらなければならぬことが山積されてはいる。農業に夢が持てるには、農村市之瀬に残り、農業を営む必要があり、農村環境の整備、いやそれ以前に、経営基盤の整備が必要である。農民人として子供の手本になる父親にならなくては……。

糧自給は重要であり、戦略物資である。確かに腹がへつては、前へ進めないし、鉄砲も大砲も撃てない。「腹がへつては戦は出来ぬ」という事らしい。

本のが、作つても余る米を次々と生産していくのを止めて、他のものを作ろうと考えるのは当然だが、はたしてこの先、これで日本は大丈夫なのだろうか。つまり私が言いたい事は、日本国民が毎日働くためのエネルギーを自国で生産しているのではなく、アメリカ合衆国にたよっているという事である。もつとアメリカからの輸入がゼロとなつたら、日本の穀物の自給率は、なんとたったの四〇％しかないのだ。しかもその率は、先進国の中で最低である。勢のたつた事だ。国際情勢の急変、あるいは異常気象などによって、いつ何時アメリカからの輸入がゼロになる日がこの日本に訪れるかも知れないというのに、この事を全国民という一度よく知らせるべきである。前中川農林水産大臣も言った。「独立国家として、有事の際の食糧自給は重要であり、戦略物資である。確かに腹がへつては、前へ進めないし、鉄砲も大砲も撃てない。」「腹がへつては戦は出来ぬ」という事らしい。